

BroadWorks 23.0からのアップグレードガイド

内容

[はじめに](#)

[概要](#)

[独立したバージョンのリリース](#)

[オペレーティングシステム要件](#)

[メジャーリリースサポートされるLinuxバージョン](#)

[独立したサポート対象Linuxバージョンのリリース](#)

[データベースサーバ\(DBS\)でサポートされるLinuxバージョン](#)

[OSのアップグレード](#)

[アップグレードの制限およびサーバ固有の注意事項](#)

[プロファイルサーバと拡張サービスプラットフォームのアプリケーション配信プラットフォームへのアップグレード](#)

[データベースサーバ](#)

[DBSリリースとOracleリリースの連携](#)

[DBSアップグレードのスキップ](#)

[拡張コールログ](#)

[Collaborateサーバ](#)

[ドキュメントの確認](#)

[ライセンス要件](#)

[ベスト プラクティス](#)

[アップグレードの前にBroadWorksサポートに通知](#)

[テスト計画](#)

[パッチ](#)

[インストール前のチェックスクリプト](#)

[ラボでのアップグレード](#)

[スケジューリングとアップグレードの順序](#)

[アップグレードの失敗](#)

はじめに

このドキュメントでは、BroadWorks 23.0のソースリリースからのアップグレードを計画する際に役立つ考慮事項と要件について説明します。

概要

BroadWorksリリース23.0では、リリース24.0および25.0へのアップグレードがサポートされています。リリース[23.0は2024年7月末にEoMとなり](#)、24.0のメンテナンス終了(EoM)は2026年7月末

に予定されています。非アプリケーションサーバを、入手可能な最新のリリースに依存しないバージョンにアップグレードします (「[ソフトウェア互換性マトリックス](#)」の「サポートされるアップグレードマップ」のセクションを参照してください)。アプリケーションサーバを2024.07にアップグレードします。すべてのサーバをアップグレードしたら、アプリケーションサーバを2026.07までの最新バージョンに再度アップグレードする必要があります。

独立したバージョンのリリース

リリース23.0以降では、MSはリリース非依存(RI)、24.0ではアプリケーションサーバ(AS)RIを除くすべてのサーバ、25.0ではすべてのサーバはリリース非依存となっています。すべての新機能、バグ、およびセキュリティ修正は、新しいバージョンで提供されます。パッチは使用できません。修正を取得するには、サーバを別のバージョンにアップグレードする必要があります。緊急の修正が必要な場合は、毎月 (毎月のパッチバンドルの代わりに) またはそれ以上の頻度で各サーバの新しいバージョンがリリースされます。

RIバージョンは、標準のRel_24.0_1.944形式とは異なる形式を使用します。このRI形式はServer_Rel_yyyy.mm_x.xxxです。

- サーバはMSです。たとえば、
- yyyyは4桁の年です
- mmは2桁の月です
- x.xxxはその月の増分リリースです

MS_Rel_2022.11_1.273.Linux-x86_64.binは、2022年11月にリリースされたMSのバージョンです。特定のサーバタイプまたは差分バージョンを指さない場合、これは2022.11に短縮されることがよくあります。

オペレーティングシステム要件

ソースのオペレーティングシステム(OS)がターゲットリリースでサポートされていることを確認します。

サポートされているOSは、Red Hat Enterprise Linux、Oracle Linux、およびCentOS 7です。[CentOS 8](#)、CentOS Stream、Rocky Linux、およびAlma Linuxはサポートされていません。

[Linux 6のサポートは、2023年4月30日に2023.05で終了しました。](#)

[Linux 7のサポートは2024年6月20日に2024.07で終了しました。](#)

Linux 9のサポートは2023.09以降で利用可能です。

メジャーリリースサポートされるLinuxバージョン

R23:5.9以降、6.5以降、7および8.x (ap385046が必要)

R24:6.5以降、7、8

独立したサポート対象Linuxバージョンのリリース

2018.01以降 : 5.9以降、6.5以降、7

2019.10+:6.5以上、7

2020.07以降 : 6.5以降、7、8

2023.05以降 : 7、8

2023.10+:7、8、9 (Linux 9は2024.04まではASではサポートされません)

2024.04以降 : 7、8、9

2024.07以降 : 8、9

データベースサーバ(DBS)でサポートされるLinuxバージョン

2018.11 ~ 2020.08:6.5以降、7

2020.11 ~ 2022.06:7.5以上のみ

2022.07以降 : 7.5以降、8.5以降

2024.07以上 : 8.5以上

2024.09:[最終リリース/サポート終了](#)

OSのアップグレード

BroadWorksでは、これまで、主要なLinuxバージョン間のインプレースアップグレードはサポートされていませんでした。従来の方法では、ハードウェアの交換を実行し、ターゲットのLinuxバージョンで新しいサーバを構築し、既存のサーバを新しいサーバに移行することを推奨します。リリース2023.12以降、Linux 7から8へ、および8から9へのインプレースLinuxアップグレードがサポートされています。インプレースLinuxアップグレードを実行するには、まずサーバを2023.12以降にアップグレードする必要があります。

インプレースLinuxアップグレードのドキュメントについては、『[ソフトウェア管理ガイド](#)』のセクション9を参照してください。ハードウェア交換プロセスに関するドキュメントについては、

『[ソフトウェア管理ガイド](#)』のセクション5.2.6と『[メンテナンスガイド](#)』のセクション12.2

ハードウェア交換を使用してBroadWorksを同時にアップグレードしたり、ハードウェア交換またはLinuxのインプレースアップグレードとBroadWorksのアップグレードを同じメンテナンス時間帯に行うことは推奨されません。データベースを持つサーバはアップグレード処理を行う必要があります。あるバージョンのBroadWorksのデータベースを別のバージョンのBroadWorksにインポートすることはできません。

アップグレードの制限およびサーバ固有の注意事項

プロファイルサーバと拡張サービスプラットフォームのアプリケーション配信プラットフォームへのアップグレード

リリース24.0以降、プロファイルサーバ(PS)と拡張サービスプラットフォーム(XSP)は同じサーバタイプになり、アプリケーション配信プラットフォーム(ADP)と呼ばれます。PSサーバとXSPサーバはアップグレードが行われ、アップグレード後にADPサーバタイプになります。23.0からアップグレードする場合、PSおよびXSPはADP 2024.07までしかアップグレードできません。その後、最新バージョンに到達するためにADPを再度アップグレードする必要があります。

導入されたアプリケーションのADPライセンスと更新バージョンが必要です。XSPのアップグレードは、アプリケーションサーバ(AS)のアップグレード後に行う必要があります。ダウンロードポータルにはPSおよびXSPのRIバージョンがありますが、これらはASの代わりに実行サーバ(XS)サーバを導入するシステム専用です。ASを使用するすべてのシステムでは、PSおよびXSPをADPにアップグレードする必要があります。

Cisco BroadWorksアプリケーションおよびWebアプリケーションは、XSP、PS、およびADPで手動でアップグレードする必要があります。

データベースサーバ

OSの制約により、データベースサーバ(DBS)を最新のRIリリースにアップグレードするには、何度もアップグレードする必要があります。DBS 22.0はLinux 5および6をサポートします。Linux 5を実行している場合、DBSは22.0を超えてアップグレードできません。DBSのRIビルドはLinux 5をサポートしていません。Linux 6を実行している場合、DBSは2020.08にアップグレードできます。その後、DBSはLinux 7にハードウェアをスワップして、再びアップグレードできるようにする必要があります。DBSおよびPSをアップグレードする場合、基礎となるOracleバージョンが互換性を確保するために、DBManagementおよびDBSObserverのバージョンがDBSのバージョンと一致する必要があります。

DBSリリースとOracleリリースの連携

22.0:Oracle 11

2018.11 ~ 2020.08:Oracle 12

2020.11以降 : Oracle 19

DBSアップグレードのスキップ

DBSのアップグレードをスキップして、DBを22.0から直接DBS 2022.03+にインポートするオプションがあります。ただし、このプロセスは短時間で終わるものではなく、実稼働に期待されるタイミングを確認するためにラボでテストする必要があります。「[DBSリリースノート](#)」セクション6、BWKS-3069、および「[DBS設定ガイド](#)」セクション6.5.7.3を参照してください。

拡張コールログ

Enhanced Call Logs(ECL)は、DBS 2020.08以降のDBSではサポートが終了しています。ECLデータベースを継続的に使用するには、ネットワークデータベースサーバ(NDS)に移行する必要があります。移行は自動的には行われません。詳細については、『[Enhanced Call Logsソリューションガイド](#)』および『[NDS Enhanced Call Logs Feature Description](#)』を参照してください。移行手順については、『[ネットワークデータベースサーバ設定ガイド](#)』および『[DBSからNDSへのECL移行の機能説明](#)』を参照してください。アップグレードの前に移行を実行する必要があります。

Collaborateサーバ

Messaging Server(UMS)、Sharing Server(USS)、Video Server(UVS)、WebRTC Server(WRS)、Business Communicator Client(BTBC)、およびConnect ClientのEoMは2022年1月31日でした。UMSで利用可能な最新のRIバージョンは22.0で、USS、UV、およびWRSで利用可能な最新バージョンは2022.01です。

24.0のASは、22.0および21.sp1のUMSと互換性があります。UMSを22.0にアップグレードすることはお勧めしません。22.0のUMSでは、アップグレードのために追加の手順を必要とするOracle TimesTenの代わりにMariaDBが使用され、別のMethod of Procedure(MoP)が使用され、冗長性のために追加のノードが必要です。「[UMSアップグレードMOP](#)」および「[MariaDB 10.1サポート終了に関するフィールド通知](#)」を参照してください。

CollaborateサービスをWebEx for BroadWorksに置き換えることをお勧めします。『[WebEx for BroadWorks Solutions Guide](#)』を参照してください。

ドキュメントの確認

ターゲットリリースのリリースノート、およびターゲットリリースとソースリリースの間のすべてのリリースを確認する必要があります。ターゲットリリースが24.0の場合は、24.0と25.0のリリースノートを確認する必要があります。

[24.0リリースノート](#)

[25.0以降のリリースノート](#)

[アップグレード手順](#)

正式にサポートされているアップグレードパスについては、『[ソフトウェア互換性マトリクス](#)』を参照してください。

ライセンス要件

ターゲットリリースには新しいライセンスが必要です。ライセンスを要求するには、[チケットを開き](#)ます。PSおよびXSPライセンスをADPライセンスに変換するように要求します。ADPはPSまたはXSPライセンスを受け入れません。

ベスト プラクティス

アップグレードの前にBroadWorksサポートに通知

アップグレードチームのサポートなしでアップグレードを実行する場合は、BroadWorks Supportに対して数日前に重大度4(s4)チケットを通知することを推奨します。メンテナンス中に問題が発生した場合は、チケットの重大度をs1に上げるか、新しいs1チケットを開くか、[サポート回線](#)に電話してエンジニアと話します。

テスト計画

アップグレードを円滑に行うには、テスト計画が不可欠です。テスト計画は、実稼働アップグレードの前にラボで作成およびテストする必要があります。アップグレードの前にシステムでテスト計画を実行し、結果を記録します。これにより、システムの健全性が確保され、すべてのテストユーザおよびアカウントが正しく設定されて機能していることが検証されます。また、テスト計画に明らかなギャップを見つける機会が提供され、テストにかかる時間の見積もりが提供されます。

アップグレードが完了した各サーバをテストして、正常に機能していることを確認してから、次

のサーバにアップグレードする必要があります。

パッチ

アップグレードを行う前に、ソースリリースに最新のパッチレベルの6か月以内のパッチを適用します。

インストール前のチェックスクリプト

プレインストールチェックスクリプトは、すべてのサーバ、ラボ、および実稼働環境で実行する必要があります。また、アップグレード前に警告や障害に対処する必要があります。

ラボでのアップグレード

実稼働環境を複製するラボ環境で、サードパーティ製のツール、アプリケーション、またはクライアントを使用して、アップグレード、テスト計画、およびターゲットリリースをテストすることを常に推奨します。ラボはスケールダウンできますが、サーバタイプ、ソフトウェアバージョン、OSバージョン、アクセスデバイス、セッションボーダーコントロール(SBC)などが同じである必要があります。ラボでのアップグレードは、実稼働環境のアップグレードの場合は予行演習として扱ってください。ラボをアップグレードするときは、最新のターゲットリリースパッチレベルを使用します。ラボ環境から実稼働環境へのアップグレードまでの期間を3か月以下に抑えます。

スケジューリングとアップグレードの順序

アップグレードは、複数の夜間にまたがる複数のメンテナンス時間帯に行うことが想定され、『[ソフトウェア管理ガイド](#)』のセクション4.2に記載されているように、インストールおよびアップグレード順序で実行されます。アップグレードは必ず、事前に決められたメンテナンス時間帯（最頻時ではない時間帯）に実行してください。常に1ノードずつアップグレードし、常にクラスタの1つ以上のノードがダウンしていることを確認してください。メンテナンスウィンドウ(MW)の長さ、アップグレードするサーバの数、サーバタイプ、およびテストの予想所要時間によって、必要なメンテナンスウィンドウの数が決まります。クラスタ内のすべてのサーバは、同じMWでアップグレードする必要があります。必要に応じて、トラブルシューティングやロールバックのために、スケジュールされたMWで時間を空けておきます。

アップグレードの失敗

アップグレード後のテスト中に問題が検出された場合、またはアップグレードが失敗した場合は、ログを収集してからソースリリースに戻るか、サーバを復元します。ログディレクトリ全体を

バックアップして、有用な可能性があるすべてのログを確実に保持します。直ちにチケットを開き、MWにいる間にサポートを依頼してください。

翻訳について

シスコは世界中のユーザにそれぞれの言語でサポート コンテンツを提供するために、機械と人による翻訳を組み合わせて、本ドキュメントを翻訳しています。ただし、最高度の機械翻訳であっても、専門家による翻訳のような正確性は確保されません。シスコは、これら翻訳の正確性について法的責任を負いません。原典である英語版（リンクからアクセス可能）もあわせて参照することを推奨します。